

## 特集Ⅰ 総合プロジェクト研究「幕末・明治期の外国文化受容」

### ◆公開講演会：「明治」再考（1994年6月3日開催）

#### はじめに

本日は私たちの講演会に多数お集まりいただき、ありがとうございます。

本学の国際言語文化研究所は、1989年の開設以来、毎年2、3回の公開講演会を開いてきましたが、最近はその活動の一環として行われている、幕末明治期の国民国家形成にかんする共同研究の進行に合わせて、この領域の優れた研究者をお招きして、一貫したテーマのもとに連続の講演会やシンポジウムを開いています。

今回は色川大吉先生と加藤典洋先生をお招きすることができました。色川さんは私の最も敬愛する歴史学者で、皆様御承知のように、自由民権運動研究の第一人者であると同時に、「自分史」の提唱者であり、戦争体験と平和憲法、あるいは水俣の問題に、実践的に深くかかわってこられた方であり、またユーラシア大陸縦断を実現した大旅行家でもあります。とりわけ本年はさまざまな意味でライフワークと言える「北村透谷」論を完成され、色川史学の真価を改めて示されました。

加藤典洋さんも、私の最も敬愛する文学批評家です。私は加藤さんがかつて勤務しておられたカナダのモントリオール大学に客員教授として招いていただいたという縁があって、その後加藤さんが『アメリカの影』（1985年）で批評家としてデビューされ、今日の地歩を築かれるまでを、少し離れたところからではありますが、ひそかに眺めながら共感の拍手をおくってきました。とりわけこの3月に出版された『日本という身体——「大・新・高」の精神史』はたいへんな力作で、私にとっては思想史的な一つの事件でありました。

色川さんの『北村透谷』と加藤さんの『日本という身体』という二つの重要な著作が、本年ほとんど同時に書下され出版されたということは、単なる偶然とは思われません。全く別の領域で活躍され、世代も発想もスタイルも全く異なったお二人が、このような形で接近し交差しうるということを、私は全く予想していませんでした。お二人が接近交叉していると私が感じるのは、例えば次のような文章においてです。

加藤さんは明治維新以後の125年間について、次のように問いかけています。《ひとくちでいえば、このような、最長不倒距離125年の「飛行能力」をもった歴史感覚な

ii 特集I 総合プロジェクト研究「幕末・明治期の外国文化受容」

しに、わたし達に、日本の近現代の経験を「ひとつながり」の文脈として受けとることは、できない。明治以来、この125年のわたし達の経験とは結局なんだったのか。わたし達はなにをしてきたのか。》(p.37第1章「歴史感覚の回復」)

色川さんは、『北村透谷』の最終章で次のように問うておられる。《透谷のその声は時代の嘆きでもある。19世紀と20世紀とそれぞれに違った世紀末を生きながら、彼は国民国家の形成期に、私達はその国家の時代の終焉期に、100年をはさんで相対している。こうした相対の視覚から何が見えて、何が見えないか。》(p.259)

今年は北村透谷没後100年にあたりますが、私達はいま世界の大混乱のなかで、世界史的な歴史感覚を失いつつあるのではないか。海図をもたない航海のなかで羅針盤ともいべきものを失いつつあるのは恐ろしいことだと思います。

われわれは歴史感覚をなんらかの形で回復しなければならない。そのためには過去、少なくとも、そしてとりわけ失われた明治を視野に入れ、自分のものとして再び獲得する必要があるのではないのでしょうか。その意味では「明治」をテーマにした今日の会は、きわめて現代的な問題を扱うことになると思います。

今日の会の主旨を主催者としてこんな風にまとめてみました。おそらく間違っているかもしれませんが。今日はシンポジウムの形をとらず、お二人のお話をじっくり聞かせていただく会にしました。どうか全く自由にお話し下さい。よろしく願います。

立命館大学国際言語文化研究所長

西川長夫